

ルイス・キャロル協会の成立と歴史について

笠井 勝子

はじめに

19世紀後半にイギリスの大学で数学講師をし、論理学の本を書き、なぞなぞやパズルゲームを考案し、ノンセンスということば遊びを自由にし、子どもたちに宛ててユニークな手紙を数多く送り、人物写真家の5指に数えられたチャールズ・ラトゥイッジ・ドジスは、ルイス・キャロルの筆名で『不思議の国のアリス』(1865)、『鏡の国のアリス』(1872)、『スナーク狩り』(1876)、『シルヴィーとブルーノ』(1889)、『シルヴィーとブルーノ完結編』(1893)等の物語を世に送った。学生を教えることをあまり得意とはしなかったものの1855年から26年間数学講師の職にあり、教授社交室主任として、うるさい程几帳面に仕事に目を行き渡らせた。当時聖職者は立ち入らなかつた劇場に足を運び、芝居を見るだけに止まらず、楽屋を訪ねて女優や子役らと交流し、その頃流行のラファエル前派の絵を好んで、画家たちの親交を得、その仕事場へ自由に入りして絵画や彫刻の写真を撮った。こどもに語り聞かせた物語を手書きの本に作れば、自分なりの挿し絵を描き込み、列車の旅には、車中出会うこどものために、パズルやゲームや尽きないお話の泉が用意してあった。

ルイス・キャロルに備わっているさまざまな特質に、多様な人々が関心を寄せた。その中には、言語研究者もコレクターも、天文学者も食文化研究者も、こどももおとなも入っている。彼らに一つの地軸を与え、研究成果の分かち合いを可能としたロンドンのルイ

ス・キャロル協会について、その成立と貢献をたどってみたい。

ルイス・キャロル協会 (ロンドン)

ルイス・キャロル協会設立の提案は、エリス・ヒルマンから出た。彼は当時のロンドン市議会議員であった。ロンドン市議会 (the Greater London Council) とは、1986年に、時のサッチャー首相に廃止されるまで、ロンドンの地方行政を担っていたところである。この議会の所在地ロンドン市庁舎は、ウェストミンスターブリッジのそばで、テムズ川を望むところにあり、国会議事堂はテムズの川向かいにあった。当時、アン・クラークはロンドン市議会に勤めて、仕事柄、ヒルマン氏の選挙区住民の住宅問題の記録を作成する手伝いをしたことがあった。その頃、英文学に関する自分の草稿をヒルマン氏に見せて、それが縁で彼はアン・クラークを文学に造詣が深いと考えるようになっていた。そこでヒルマン氏はアンにルイス・キャロル協会の名誉幹事になって第一回の会合を開いてみないか、ともちかけた。初めは断っていたアンも、他に人が見つからないことから、とにかく開催まで務めて、他の人に代わってもらおうということになった。

こうして、1969年5月、ロンドン市庁舎で第1回目の会合が開かれた。参加者の大半はロンドン市議会に働くスタッフであったが、ルイス・キャロルの大甥で彼の遺著の管理者でもあるフィリップ・ドジスン・ジェイクスが親族を代表して出席した。氏は今日にいた

るまで協会にとってよき協力者である。講演は、ギルフォードの(博物館分室)資料室室長のE.ダンス博士が「ルイス・キャロルとギルフォードの関係」について行い、好評であった。ギルフォードの資料室には主としてフィリップ・ドジソン・ジェイクスやキャロルの親族から寄託されたキャロル関係の一次的資料が揃い研究に役立っている。

第一回総会で採択された協会の目的は、現在の会則の中に盛り込まれている。特徴ある会則の中でも、第五条入会の初年度に収める会費についての規定は、キャロル協会らしく、合理的である。すなわち、毎年10月1日に年会費を納入すること。但し、1月1日～3月31日、4月1日～6月30日、7月1日～9月30日の間に入会した者は、それぞれ年会費の四分の三、二分の一、四分の一を収めればよい、と。総会は少なくとも、年三回開かれる。協会の役員会が一致して、不適切と判断した会員は総会において除名される。但し、次の総会に控訴する権利が認められている(第六条)。これもキャロルの厳密さとユーモアである。

第一回総会でヒルマン氏が会長に選出された。彼は現在もその任にある。アンの同僚のティム・レナード氏が委員長に選ばれた。しかし幹事を引き受ける人がいないため、当分の間アン・クラークが実務処理を引き受けることになった。

協会の活動は、ルイス・キャロルを実際に知る人びとが現存していること、また彼らが高齢で少数になってきている事実を知ったアン・クラークの熱意に負うところが大きい。アンは、彼らの思い出すことを収集し、ルイス・キャロルとアリス・リデルについての背景資料を調査した。その成果が、彼女の二つの著作『ルイス・キャロル』と『リアル・アリス』となって結実している。

協会が単にルイス・キャロルの愛好者の会

に止まっているは、その活動に限界があると判断したアンは、エリス・ヒルマンに研究誌の発行を提案し、ヒルマンは誌名を「ジャバウォッキー」と命名して、発足の年の秋の総会に向けて発行の準備を進めた。

「ジャバウォッキー」は1969年10月の第2回総会を機に創刊号を出し、今日まで約70号を出している。

ルイス・キャロル協会発足のニュースは新聞、ラジオで紹介され、総会当日の朝、アン・クラークはラジオ番組「ピート・マレイのオープンハウス」に出演し、協会についての紹介を行っている。番組では引き続いて、ビューティフル・スーパス(『不思議の国のアリス』の中のパロディ詩に由来する)というポップグループが最新作を披露したが、その曲名も「ジャバウォッキー」(ジャバウォックは、『鏡の国のアリス』の中にある、アングロ・サクソン詩になぞらえた、裏返しの鏡文字による書出の詩に続く、叙事詩の中に出てくる怪物の名前である)。この放送が縁で、ミッドランドの開業医セルイン・グッドエイカーが協会のメンバーに加わり、以来彼は協会の主力メンバーとなった。

グッドエイカーは11才の時からキャロル関係のものを集め始め、英国では個人で最大のコレクションを所有している、といわれる。1989年に彼の語ったところでは『不思議の国のアリス』については千五百以上の版を所有している、という。しかもその数は年毎に増加する。彼は協会の委員長を務め、1976年には、アン・クラークの後を継いでジャバウォッキーの編集にあたっている。

会の発足当初、アン・クラークはルイス・キャロルについて書物を出版した人々へ手紙を送り、協会に多くの学者、研究者が集まってくるきっかけを作った。その中にはキャロルの日記の編纂者のロジャー・ランスリー・グリーン、手紙の編者であり、キャロル

について貴重な研究書を出した伝記作者のモートン・コーエン、ディレック・ハドスン、アレグザンダー・テイラー、フローレンス・ベッカー・レノンなどがある。協会の定例会において彼らは、いくつかの講演を行なっている。会員数については、増減が見られるものの、ほぼ250~300名で、会員たちの会合はやがて月例会となり（夏期休暇の時期を除き）、また通常は年に1度キャロルにゆかりの地へ行き研修会を開催している。

ロングリート

さらにキャロル展開催の動きが出てくる。第一回はバース侯爵の館ロングリートで行われた。ここは、ライオンやトラなどの野性動物園としても知られ、侯爵はキャロルやアリス・リデルの手紙と書物のコレクションの所有者でもある。この展覧会の主たるオーガナイザーは協会員デニス・クラッチ、メアリ・クラッチ夫妻を中心にした開催のための協会運営委員会であった。展覧会は、1973年4月2日から9月30日まで6カ月間続いた。展示された本の中には、キャロルが回収を指示した1865年版の『不思議の国のアリス』や、キャロルの直筆の手紙、写真、ドジスン家の子どもたちが遊んだ玩具などが見られた。子どもたちにとっての呼び物は、特製のアリス物語の登場人物で、その中には長さが30フィートの赤い目玉をした怪獣ジャバウォックが、天井からぶら下がって、飛行をする風情で回転していたし、馬に乗った等身大の白の騎士もいた。この展覧会を機に、協会のメンバーは研究論文集、*Mr. Dodgson : Nine Lewis Carroll Studies*を出版した。冒頭にはフィリップ・ドジスン・ジェイクスが、ドジスン家の家系を17世紀のジョン・ドジスン（1643年生れ）から今日まで10世代に亘って辿り、その家系図を載せて解説している。この系図の中で、キャロルはジョン・ドジスンから数え

て、6世代目になる。キャロルの没年に『ルイス・キャロルの生涯と手紙』を出版したステュワート・ドジスン・コリングウッドはキャロルの妹のメアリ・シャーロットとチャールズ・コリングウッドの間に生れた長男でキャロルには甥にあたる。系図の著者フィリップ・ドジスン・ジェイクスは、キャロルの弟で牧師のスケフィントン・ヒューム・ドジスンの長女エイミーとジョン・ジェイクスの長男で、キャロルは彼にとって母方の大伯父になる。この論文集には、他にアン・クラークの『アリスの三つの顔』、トニー・ピールの『数学者、ドジスン』、グレーム・オーヴェンダンの『C.L.ドジスン——写真家と画家』、デニス・クラッチの『不思議の国の言語学者』、イーヴァ・デイヴィスの『聖職者、ドジスン師』などがあり、これらのテーマをみても協会の関心が多方面に亘っていることがわかる。

展覧会はロングリートに続いて、シェフィールド、ロンドン、それから、キャロルがクリスマス休暇に滞在して、亡くなったオールバニー公爵の子供たちアリスとチャールズに物語を聞かせたソールズベリ卿の館ハットフィールドで開催された。

1973年には、会報「バンダースナッチ」の発行が始まった。この会報は会員のための情報提供が中心で、ルイス・キャロルとアリスに関する研究会の報告や研究書の紹介、会員の動向と世界各地の催しなど、さまざまで特に、新聞、雑誌、その他マスコミが使うキャロルのことば遊びのパロディー紹介に注目する。また、協会では折にふれて出版物を刊行してきたが、現在は独自の出版部門をもち、協会の認めたキャロル関係著作の出版を行っている。

「詩人たちの場所」

ルイス・キャロルの生誕150年には、オクス

フォードのクライスト・チャーチの会堂 (Great Hall) において記念祝賀会が催された。この日のためにホールには、キャロルの死後にハーコマーが描いた肖像画が、特に移されてきて、参列者の仲間入りをしていた。食事ののち一同は、かつてルイス・キャロルが使用していた部屋へ移りそこで、研究会が開かれた。アン・クラークがこの時の講演を行っている。その部屋は現在はコモン・ルームとして使用されている。

ルイス・キャロルの記念碑をウェストminster寺院の「詩人たちの場所」に入れることは、協会の長年の夢であった。寺院の責任者、聖堂参事会長と参事会に対する粘り強い交渉の結果、1982年に許可を得ることができた。生誕150周年の記念の年である。この名誉な場所に入る特権を与えるのは、ウェストminster寺院の総長、エドワード・カーペンター尊師である。許可を下す前提として参事会が求める条件が二つある。一つは、「詩人たちの場所」にふさわしいという人々の合意が広く得られること、いま一つは、記念碑を作成し寺院の床に敷き込むのに伴う必要な費用の調達ができることである。特に後者については年々その費用が上り、ざっと三千ポンドが必要になる。ロンドンの協会の呼び掛けで寄付金に協力した人々の中には、桂冠詩人ジョン・ベッチマン、ポップ・アーチストのピーター・ブレイク、キャロルの日記の編者ロジャー・ランスリン・グリーンが入っている。また、北米のルイス・キャロル協会の協力も大きい。記念式には、北米協会からディヴィッド・シェイファー夫妻が出席した。シェイファー氏は元NASAで人工衛星打上げに関わっていた。現在はジョージ・メイスン大学で数学とコンピューターの講義をしている。

チャールズ・ラトウィッジ・ドジスの記念碑除幕式は、1982年12月17日金曜日、ウエ

ストminster寺院で、5時の晩禱に続いて行われた。「詩人たちの場所」には、前年3月1日にディラン・トマスが一足先に入っていた。

式に先立ち出席者は全員晩禱に臨んだ。晩禱には、ウェストminster (ロンドン市内の自治区) の市長が、寺院の総長ならびに参事会員に出迎えられて、特別席へ着席した。そこにはドジス家の親族や、昔、キャロルが学んだリッチモンド校の校長も座っていた。また、少し遅れて、記念石に飾り文字を描いて彫り込んだ書家で彫刻家のジェイユアン・リーズも芸術家特有のいでたち、セーターにサンダル履きの姿で加わった。

晩禱の第一朗読は、旧約のマラキ書3:3-18で、キャロルの故郷であるダーズバリの教会の牧師、スタンリー・ベケット師が読み上げた。第2朗読は新約のピリピ人への手紙から3:1-16を、キャロルが亡くなった町ギルフォードの教会の牧師ブライアン・テイラー師が読んだ。ついで説教はヘイ・オン・ワイの牧師でブレカン大聖堂の名誉参事またルイス・キャロル教会会員のイーヴァ・デイヴィスがおこなった。

晩禱が終わると、除幕式のために参列者は南の翼廊にある「詩人たちの場所」へ移動した。床の記念石は、ウェストminster寺院の紋章の旗で覆ってあった。その紋章は、赤、青、金色で描かれたチューダー家のバラと豹、百合、さらに足のない紋章用の5羽の鳥が十字架を囲んでいる図柄である。

ブライアン・シブリーが『不思議の国のアリス』の最後の一節を朗読した。それに続いて、ルイス・キャロルの大甥のフィリップ・ドジス・ジェイクスが紋章の覆いを除くと、記念石が現われた。原石は、モス・リグと呼ぶ緑がかった石で、カンブリアのスレート採石場の地下深くから採掘された。石には彫刻家のリーズ氏がデザインした文字が白く三重

の円を描いて彫ってある。中央部はCharles Lutwidge Dodgson 1832-98の文字が横書きで、全体として円の中に納まっており、その外側をLEWIS CARROLLと大文字でぐるりと丸く取り囲んで、一番外は、上の半円にStudent of Christ Church Oxford Buried at Guildfordの文字を配し、下の半円には、キャロルの作品「シルヴィーとブルーノー」の巻頭詩の第一行から、Is all our Life, then, but a dream?を配して刻んである。その記念碑に、P.D.ジェイクスの2人の孫娘、ホリー・ルークとクシー・ルークの幼い姉妹が小さな花束を置いた。続いて北米協会の会長と幹事を務めるディヴィッド・シェーファー夫妻が花輪を捧げた。そこで、協会の82年度の委員長であるロンドン博物館員リンジー・フルチャー女史は、協会を代表してつぎのような献呈のことばを述べた。“May I ask you, Mr. Dean to take into your safe keeping, on behalf of the Dean and Chapter of Westminster, this Memorial Stone which has now been unveiled.”

式はウェストミンスター寺院総長の祝福の祈りで終了した。

Mrs.Thatcher, Office Snatcher

“The British branch was started in 1969, in, of all places, London’s County Hall...” モリー・パンター=ダウズがニュー Yorker 誌の中に書いているとうり、イギリスのルイス・キャロル協会は、こともあろうにロンドン市庁舎の中に、その事務局をおいて発足した。市庁舎で開かれていた例会は、1986年の市議会の廃絶と共に、その拠点を奪われた。保守派で通したキャロルの名の下に集まった人々の協会事務局が、非情な改革者サッチャー女史の号令の下、巷に放り出されてしまったのである。現在はロンドン大学のパーベックコレッジで月例会を開いているが、連絡先

は、その年度の役員の自宅になった。キャロルが知れば、どんな痛烈なパンフレットを書いて、彼女を非難したことであろうか。

国際会議の開催

ロンドンの協会は、1989年に初の国際会議を開催した。当時の委員長はマーク・リチャーズで、幹事はキャサリン・リチャーズ博士、元委員長で数学と論理学の教師エドワード・ウェイクリングが加わって組織、運営をおこなった。大会は宿泊つきで、オクスフォードのクライスト・チャーチで開かれ、国外からは、日本、アメリカ、カナダ、オーストラリア、スイスからの参加があった。

Bibliography

Alice at Longleat: The Lewis Carroll Society, Longleat Warminster 1973.

Alice and the Space Telescope: Malcolm Longair (Regius Professor of Astronomy at the University of Edinburgh, and Director of the royal Observatory, Edinburgh) The Johns Hopkins University Press, 1989.

Lewis Carroll—A Biography: Anne Clark, J.M. Dent & Sons, 1979.

Letter from London: Mollie Panter-Downes, The New Yorker January 31, 1983, pp.90-93.

Mr.Dodgson—Nine Lewis Carroll Studies: The Lewis Carroll Society, 1973.

The Real Alice: Anne Clark, Michael Joseph, 1981.

The unveiling of a Memorial to Lewis Carroll: Westminster Abbey, 1982.

Letters from Anne Clark Amor addressed to the present writer, 1993.

サッチャー時代のイギリス: 森嶋通夫, 岩波新書49